

それから土人栽培して居る作物は稻が一番主なものといふのは前に申しましたが、其外に玉蜀黍、カツサバ、落花生、甘藷、サゴバーム、爪哇薯、大豆、緑豆、即ち緑色の小豆ホウモ、さういふやうなものであります。此中一二のものに就て極く簡単なことを申しますと、玉蜀黍は可なり汎く栽培して居るものであります。何處の國でも多く山で作るものであります。爪哇では殊に山間部で玉蜀黍を澤山作つて居ります。何處へ行つて見ても玉蜀黍が良く出来て居るといふことは、私は見ませぬでしたが爪哇では面白い利用があるので、即ち實を取るのが唯一の目的でなくして、實は勿論農家の食料に多く用ゆるのであります。其外に玉蜀黍の穂を包んで居る皮を盛んに利用する。何にするかといふと、あれで煙草を包んで爪哇人が喫むのであります。カツサバは即ちタビオカの原料たる澱粉を生産する作物であります。近來一般に澱粉類の値が下落つて居るので非常に困つて居るのであります。サゴバームといふものは椰子の類であつて、其幹の中から澱粉を取

る作物であります。斯ういふものはエステートなどはないので、多少土人がやつて居るに過ぎないのであります。それからジャガタラ薯であります。是は御承知でもありません。日本では馬鈴薯などいひますが、ジャガタラ薯といふとは前からいふので、是は爪哇から初めて日本に來たのであります。だからジャワ薯ともいひますが、ジャガタラ薯といふものはパタビヤが昔はジャガトラといひましたので、パタビヤを経て日本に來ましたからジャガタラ薯と申しますので、馬鈴薯といふ名稱は本當はよくないのであります。馬鈴薯といふものは多少似て居るだけで本當のジャガタラ薯ではないといふのであります。此ジャガタラ薯は元來何處から出たものかといふと、南米の智利や、秘露ペルーのプラトに自然生があるので、そこが原産地で、それを爪哇で早くから作つたのである。原産地は熱帯の高原であつて非常に乾燥な處である。それであるから爪哇へ持つて來ても平地の暑い處では病害に罹るから出来ませぬが、海上面から千尺以上の處であれば出来

調る。殊に四千尺位の處では却々良く出来る。爪哇のジャガタラ薯といふものは其の味が良いので、あちらへ御出でになる御方は實驗されたでありませうが非常にうまいと私共は感ずるのであります。是は全く氣候の關係に依るものと思ふのであります。あゝいふものを日本へ持つて来たからといつて日本でも同じやうにうまいものが出来るといふ譯にはいかないのであります。

段々長くなりますから此位に止めますが、前に申し述べました通りであります。爪哇には新しくエステートを開くべき處は極く少ないのであります。併し今日では一般に熱帯作物の生産物は値段が下りまして、就中ゴムは最も著しい、又珈琲でも茶でも椰子でも砂糖でも皆値が下つたものでありますから、一般に非常に困つて居るのであります。だからして今ならば既に出来て居るエステートを買ふことは幾らも出来るのであります。尤も今は利益がないから賣るのでありますから、今買つても直ぐ利益があるといふことはむづかしいことで、何か特殊の改

良をするとか、或は組織を變へるとか何んとかしなければ、逆も今直ぐに利益を得るといふことはむづかしいであります。他日熱帯の作物生産物が又高くなるといふことは必ずあることでもあります。又スマトラ、ボルネオとかいふ處には未開な土地がまだ澤山あるで、メダン方面などは大體土地は良い處と私は考へるのであります。さういふやうな處は既にエステートが充滿して居るのでありますけれど、まだ相當に良い土地はあるものと考へられる。さういふ處がありますから我が國人が此等の南洋の方面にも發展して、行くといふことは、國家の爲甚だ大切なことと考へますので、どうか有力なる諸君の御考量と御盡力あることを此の際特に希望するのであります。

## 蘭領東印度の石油事業

日本石油會社  
外事課長

松澤傳太郎

### 沿革

蘭領東印度の爪哇島に於ては、同島が和蘭領となつた以前から、石油の存在する事が、土人間に知られ、土人は之をランツーンと稱し、石油の地表に浸出せるものを採收して、藥用に供したと云ふことである。石油は現今に於ても、醫藥として外科用に、輕質油は傷口の消毒劑となり、重質油はイヒチオイルの原料となり、内科用には石油より製出せる、流動パラフィンを下劑として使用して居る。往古に於ては舊に爪哇島のみならず、石油の地表に露出する場所が、往時から發見せられて居つた羅馬尼、瓦利西亞、露西亞バク地方、ベルシヤ、北米合衆國日

本の越後等に於て、何れも等しく、石油が醫藥として使用せられて來たのである。蘭領東印度に於て、石油採掘の目的を以て、始めて鑿井の行はれたのは、一八七一年で、當時和蘭人が爪哇島のチェリボン州に於て、鑿井を試みたるも、石油を採取するに至らずして失敗に終つた。其後爪哇島に於て、一八八八年にドルツ石油會社 (Dordtsche Petroleum Maatschappij) が創設せられ、技師アドリアン、ストープ氏 (Mr. Adrian Stoop) 監督の下に、スラバヤ市の附近ジャバコタ (Djabakotta) の、石油コンセッションに鑿井を行ひ、石油を採取し、一八八九年から、石油製品を市場に賣出した。其後數年間はスラバヤ市附近の油田は、爪哇島に於ける唯一の石油産地であつたが、次いでレンバン州にも石油が発見せられ、現今では其産額に於て、レンバン州は、スラバヤ州を遙かに凌駕し、其割合は、四と一との比に於けるが如くである。其他爪哇島に於て、諸所に試掘せられたるも、前記二州を除いては、唯スマラン州に少量の産出あるのみで、他州には未だ

石油が発見せられなす。

スマトラ島の北部に於ける石油業は、一千八百八十三年にツアイルケル氏 (Mr. A. G. Zijlker) がランカットの、サルタン (Sultan van Langkat) から、ランカット州のルバン河に沿ふて、テラガサイド (Telaga Said) の石油コンセッションを獲得したるに始まり、其後千八百九十年に、コトニングクリツケ・ニードルランツシエ會社 (Conningklijke Nederlandse Maatschappij) 即ち英譯で云ふと、ロイヤルダツチ會社 (Royal Dutch Company) が創設せられ、前記テラガサイドのコンセッションを譲り受け、之に試掘を行ひ、該油田を開發し此れと同時にバンガラランブランドン (Pangkalan Brandan) に製油所を設け、テラガサイドから同製油所迄石油鐵管線を布設して、大に石油業を營むに至つて、北部スマトラの石油業は、次第に發展した。更にロイヤルダツチ會社は一千八百九十五年にランカット州に於てペルタン、アンバイ、ブキットマス等の石油コンセッションを獲得して、大

に發展し、北部スマトラに於て、一千八百九十七年には、其年産額十八萬二百噸、其翌年には二十七萬二千噸の産油を得るに至つた。超えて一千八百九十九年以來ラテガサイト地方の産額は、著しく減退せるも、一千九百年に至つて、アチエー州ベクラク油田が開後せられ、漸次其産油額増加して、一千九百九年は其年産額四十九萬二千噸に達し、北部スマトラ油田の全盛時代を出現したのであるが、其後漸次減退を來した。但し一千九百十七年には、アルバイ・コンセツションに良出油井出現し、其産額は幾分の増加を示して居る。

南部スマトラに於ては、一千八百九十七年に、ムアラエニム石油會社 (Mooera Enim Petroleum Maatschappij) 及、スマトラバレンバン石油會社 (Sumatra Palembang Petroleum Maatschappij) が創設せられ、バレンバン州の油田が開發せられ、其産額は逐次増加し、南部スマトラに於て、一千九百九年には、三十五萬一千噸の原油を産出し、爾來幾分の減少を見たるも、一千九百二十年に於て尙三十

萬二千噸の産額を保つて居る。

近年南部スマトラの、ジャンピ州に於て、後に述ぶるが如く、頗る有望なる油田が、數多發見せられたるを以て、將來大に發展するに至るであらうと思ふ。

ボルネオに於ては、英國のシエル輸送貿易會社 (Shell Transport and Trading Company) が、一千八百九十七年に、蘭領印度商工業會社 (Nederlandsche Industrie en Handel Maatschappij) を組織して、コライ (Kotei) 地を方の石油試掘に着手し先づサンガサンガ (Sanga Sanga) 油田を開發し、バリクバン (Balik Papan) に製油田所を設けて、大に石油業を營み、次第に發展した。次いで一千九百六年にはボルネオの東海岸に在る、タラカン島に於て新に油田が開發せられ、又一千九百年には、サンガサンガ油田の西南に在る、サンボジャ油田が開發せられ、ボルネオの産油額は、爪哇及スマトラ兩島合併の産油類を凌駕し、最近數年間は蘭領東印度全額の六割餘を占むるに至つた。

前述せるが如く、ローヤルダッチ石油會社は、スマトラ島のランカット州に於て、石油事業を開始し、同州に於て發展し、其後同島のアチエー州及、バレンバン州に發展せる、諸石油會社を買収し、スマトラ島の石油業を統一し、更に一千九百七年には、ボルネオに於て大に發展せる、シエル輸送貿易會社と合同して、一大シンジケートを形成し、是れと同時に新にバタフシエ石油會社 (Batavia'sche Petroleum Maatschappij) を起し、同會社をして、一方に於ては爪哇に於ける石油會社を買収して、蘭領東印度に於ける石油業を殆んど統一し、他方に於ては、新油田の試掘を行ひ、續々其成果を得。蘭領東印度に於ける石油業をして、大に盛大ならしめたのである。

#### 石油の産地及其産額

蘭領東印度に於ける、現時の重なる石油産地はスマトラの北部に於ける、ランカット及、ベルラク地方、南部に於けるバレンバン州、爪哇に所けるレンバン、

スラバヤの二州、ボルネオに於けるコタイ地方一帯、及タラカン島等なるも、其他チムール、セラム、マヅーラの三島にも、少量の産出がある。近き將來に於て、中部スマトラのジャンピ油田が、大に發展するであらうと思はれる。此等の産油地の地質は、殆んど凡て第三紀の中、新期及最新期に屬すと雖も、チムール、セラムの兩島に於ける産油地は、近代生の三疊紀に屬すと云ふ事である。而して其地層は大抵頁岩及砂岩から構成せらるゝも、ボルネオ及スマトラに於ける油田に在りては、頁岩及砂岩層中に、石灰岩を挾有することがある。爪哇及マヅーラに於ける産油地の地層は、石灰岩を挾有するを特徴とする。爪哇、スマトラ、ボルネオの三島中、爪哇は既に能く開拓せられたるも、ボルネオ、スマトラの兩島は未だ十分開かれざるの寶庫にして、此兩島に於ては、今後尙幾多の新油田が開發せらるゝ事と推測せらる。

蘭領東印度に於て、始めて原油を産出せしは、前述せるが如く、一千八百十

九年にして、同年の産額は一千噸に充たざるの少量なりしも、其後年々増加し、十年後の一千八百九十九年には二十三萬一千噸、二十年後の一千九百九年には百三十八萬五千噸、三十年後の一千九百十九年には二百九萬二千噸に増進し、一昨年は其産額二百二十八萬四千噸に達し、本邦一昨年の産額の八倍強に當つて居る。而して世界の産油國に對する産額の順位如何と云ふに左表に示すが如く、一千九百二十年の石油産額に於て、蘭領東印度は、米國、墨西哥、露西亞に次ぎ、第四位にあつて、同年の世界石油全産額の、千分の二十五を産出して居る。

一九二〇年の世界各國の石油産額

國名	産油額(佛噸)	同(バーレル)	世界全額油容量に對する百分比
米國	六二、一八八、〇〇〇	四四三、四〇二、〇〇〇	六三・八
墨西哥	二四、四一〇、〇〇〇	一六三、五四〇、〇〇〇	二三・〇
露西亞	三、四七一、一三〇	二五、四二三、六〇〇	三・六
蘭領東印度	二、二八四、一三六	一七、五二八、二一〇	二・五

波新	一、六八五、二一九	一二、三五二、六五五	一・八
印度	一、〇〇〇、〇〇〇	七、五〇〇、〇〇〇	一一・一
羅馬尼	一、〇三四、一二三	七、四三五、三四四	一一・一
瓦利亞	七六四、八一八	五、六〇六、一一六	〇・八
秘露	三七三、二八〇	二、八一六、六四九	〇・四
日本	二八五、〇七六	二、一三九、七七七	〇・三
トニダツド	二八九、七一二	二、〇八三、〇二七	〇・三
亞爾然丁	二四二、五〇二	一、六六五、九八九	〇・二
埃及	一五二、一二五	一、〇四二、〇〇〇	〇・二
英領ボルネオ	一四六、二八五	一、〇一五、九九九	〇・二
グエネズエラ	六九、五三九	四五六、九九六	〇・二
佛蘭西	五四、九〇〇	三八八、七〇〇	〇・二
獨逸	二九、九五〇	二一二、〇四六	〇・二
加奈太	二六、二五八	一九六、九三七	〇・二

年次	ボルネオ	北部スマトラ	南部スマトラ	爪哇	セラム	計
1920年	—	—	—	1,000	—	1,000
1921	—	—	—	5,000	—	5,000
1922	—	—	—	11,000	—	11,000
1923	—	—	—	11,000	—	11,000
1924	—	—	—	11,000	—	11,000
1925	—	—	—	11,000	—	11,000
1926	—	—	—	11,000	—	11,000
1927	—	—	—	11,000	—	11,000
1928	—	—	—	11,000	—	11,000
1929	—	—	—	11,000	—	11,000
1930	—	—	—	11,000	—	11,000
合計	—	—	—	100,000	—	100,000

(但一千噸以下を省略す)

蘭領東印度石油産額(單位噸)

年次	ボルネオ	北部スマトラ	南部スマトラ	爪哇	セラム	計
1920	—	—	—	—	—	—
1921	—	—	—	—	—	—
1922	—	—	—	—	—	—
1923	—	—	—	—	—	—
1924	—	—	—	—	—	—
1925	—	—	—	—	—	—
1926	—	—	—	—	—	—
1927	—	—	—	—	—	—
1928	—	—	—	—	—	—
1929	—	—	—	—	—	—
1930	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—

年次	ボルネオ	北部スマトラ	南部スマトラ	爪哇	セラム	計
1920	—	—	—	—	—	—
1921	—	—	—	—	—	—
1922	—	—	—	—	—	—
1923	—	—	—	—	—	—
1924	—	—	—	—	—	—
1925	—	—	—	—	—	—
1926	—	—	—	—	—	—
1927	—	—	—	—	—	—
1928	—	—	—	—	—	—
1929	—	—	—	—	—	—
1930	—	—	—	—	—	—
合計	—	—	—	—	—	—

今左に蘭領東印度に於ける、各地方別の各年別石油産額を示せば、左の如し。

伊太利	英他	合計
四、七五〇	九九一	九八、五一二、七八九
三、四、一八〇	六、九二五	六、九四、八五四、〇〇〇
〇・二	〇・二	一〇〇・〇



1211	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000
1212	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000
1213	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000
1214	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000
1215	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000
1216	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000
1217	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000
1218	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000
1219	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000
1220	4,114,000	1,333,000	1,847,000	1,267,000	—	1,547,000

右表によつて明かなる如く、ボルネオの産額は同島の油田開發以來逐年増加し、一千九百八年頃一時稍減退を來したるも、其後順調に發展し、次第に其産額増加し、一千九百二十年には百四十五萬五千噸を産し、蘭領東印度全額の六割八分を

占めて居る。次に北部スマトラの産額は、開發以來逐次増加したるも、一千九百九年の四十九萬二千噸を以て絶頂として、其後は漸次減退を來し、近年頗る振はざるの状態である。南部スマトラも、北部スマトラと同じく、一千九百九年の三十六萬一千噸を以て最多額とするも、其後の減退は北部スマトラの如く甚しからず、近年の産額は北部スマトラを遙かに凌駕し、尙將來ジャンピ州の油田が開發せらるゝ場合には、大に其産額増加すると豫想せられて居る。爪哇に於ては、最も古より石油が産出せられ、其産額に於て急激の増進なきも徐々に増進し、一九百二十年の産額は南部スマトラと伯仲の間に在る。將來非常な發展は望むべからざるも、尙幾分は其産額も増進するの狀勢である。

油 質

スマトラ産、及ボルネオ産の原油は、概して多量の芳香族炭化水素を含有し、揮發油及燈油に富むも、タラカン島産の原油は、重油に富み、揮發油を含有せず

而してボルネオ産の原油は、多量にパラフィンを含む事あるも極めて少くして、パラフィンを製出するに適せぬ。爪哇島スラバヤ州産の原油は、燈油及重油に富み、揮發油の含有量少きも、レナン州産のものは、揮發油及燈油に富み、且多量のパラフィンを含有す。今左に各地産原油の比重並に分餾成分を表示す事にする。

産地	比重	揮發油分 攝氏一五〇度以下 にて餾出のもの	燈油分 攝氏一五〇度乃至三〇〇度 にて餾出のもの	重油
北部スマトラ ペルラク	(ボーム五・一・五)	五二	三九	九
南部スマトラ パレンバン	(ボーム二・一・五)	一八	三三	四九
ボルネオ サンガサンガ	(ボーム三・四・八)	一五	五〇	三五
ボルネオ タワカン	(ボーム一・七・五)	—	三八	六二

爪哇 レンドンバン州	(ボーム八・三・九)	一七	五〇	三三
爪哇 スラバヤ州	(ボーム二・二・三)	三	五四	四三

鑿井及採油

蘭領東印度の油田に於て、現時最も並通に採用せられて居る鑿井法は、米國式網掘鑿井法、加奈太式鑿井法、ウオーク、ラビッド式鑿井法等であつて、近來ロータリー鑿井法が米國より輸入せられたるも、未だ一般に普及せられて居ない。

鑿井技師は、始めは北米合衆國人、加奈太人、獨逸人、ガリシヤ人等に需めたるも、年月を経るに従つて、漸次和蘭人を以て之に代らしめ、現今では和蘭人以外の技師は其數少く、多くは和蘭人にして、和蘭人と土人との間に生れた、混血兒の技師もある。然れども土人の鑿井技師は未見る能はずと云ふ事である。

鑿井職工は、鑿井頭に、鑿井助手とに別れて居り、一個の坑井の堀鑿には一人

の熟練なる鑿井頭に、八人乃至十四人の助手とが之に従事する、鑿井頭は多くは和蘭人、其他の白人、又は白人と土人との間に生れたる混血兒であつて、助手は大抵支那人及土人である。

鑿井用機械器具及鐵管は、最初は米國品を使用したるも、其後獨逸品及和蘭品を主として使用して來た様である。然るに歐洲大戰開始以來、獨逸品の輸入杜絶せる爲め、再び米國品を使用する事となつたとの事である。

採油は普通蒸汽機關、又は瓦斯機關による、單獨汲唧筒採油及、ポンピングバツリーによる、連結汲の唧筒採油であつて、特に油量多き坑井、若くは原油と共に出水多量なる坑井には、壓搾空氣によるエヤリフト採油法を採用して居る。

製油所及其製品

蘭領東印度原油は、現今左記六大製油所に於て精製せられて居る。

(一)バリクババン (Balik Papan) の製油所(東部ボルネオ)

- (二)バンカラ、ブランドン (Pangkalan Brandan) の製油所(北部スマトラ)
  - (三)ブラジュー (Bladjoe) の製油所(南部スマトラ)
  - (四)バグースクーニング (Bagoes Koening) の製油所(南部スマトラ)
  - (五)チエーブ (Tjepoe) の製油所(爪哇レンバン州)
  - (六)ヲノクロモ (Wonokrome) の製油所(爪哇スラバヤ州)
- 此等六大製油所に於ける蒸餾法は、連續式を採用するのと、單獨式を採用するものとありて、特にバリクババン及、チエーブの兩製油所には、最新式の製蠟工場及機械油精製工場がある。

此等製油所に於て、原油は分類的に蒸發せられ揮發油、ヤラ、ソーラー油及、ダイセル油、機械油重油、アスファルト、ピッチ等とす。原油中パラフィンを含むものよりは、パラフィンを製出し、流動パラフィン、蠟燭及パチツク蠟を精製す。其他テレピン代用品、マッチング油、グリース等も製出する。

以上の製品中、名稱の奇なると、用途の特別なる爲めに、特に説明を要するはソーラ油及、デイセル油、バッチング油である。

ソーラー油 (Solar Oil) 及、デイセル油 (Diesel Oil) は、燈油と重油との中間品であつて、我國の輕油に相當するもので、普通の石油發動機、又はデイセル石油發動機の燃料となり、且瓦斯發生の原料となる。

バチック蠟 (Batick Wax) は、爪哇に於て更紗製造に使用せらるゝ蠟である。更紗製造には、以前には總て蜜蜂の巢から採取したる蠟を使用したるも、近年は凡て石油の副産物たるバチック蠟を使用する。此蠟は軟性パラフィンに樹脂及、諸種の脂肪を混合して造つたものである。

バッチング油 (Batching Oil) は、純粹なる無臭の紡錘油であつて、英領印度に於て黃麻紡織の際、纖維をして柔軟ならしむる爲めに、使用するものである。

#### 原油及製品の輸送

油井から汲揚げた原油を、製油所に輸送するには、主として送油鐵管線を使用するも、汽東の便ある爪哇油田、スマトラ油田の一部に於ては、油槽車を使用する事もある。タラカン島から、バリクババン製油所への輸送には、専ら油槽船が使用せられ、南部スマトラのバレンバン州の油田に於ても、河川を利用して、油槽船で原油を輸送する場合もある。

爪哇に於ては、スラバヤ州の油田は、ヲノクロモ製油所に近く、又レンバン州の油田は、チエプー製油所の周圍餘り遠からざる所にあるを以て、油田より製油所に至る送油鐵管線は、餘り長からざるも、ボルネオ及、スマトラに於ては、油田と製油所とは多くは遠ざかり居りて、長距離の送油鐵管線の設備がある。今左に其重なる送油鐵管線を掲げることにする。

(一) 北部スマトラに於けるペルラク (Perlak) よりバンガンブラン (Pangkalan Brandan) に至るもの

直徑五吋 延長七十六哩

- (一) 同 同 四吋 同 七十六哩
- (二) 南部スマトラに於けるペジエリン (Pedjering) からブラジョー (Pladjoë) に至るもの 直徑四吋 延長百四哩
- (三) 南部スマトラに於けるカンボン・ミンヤク (Kampung Minjak) からブラジョー (Pladjoë) に至るもの 直徑四吋 延長八十七哩
- (四) 南部スマトラに於けるラダンベイト (Ladang Paid) からブラジョー (Pladjoë) に至るもの 直徑四吋 延長百五十七哩
- (五) ボルネオに於けるサンガサンガ (Sanga Sanga) よりバリックババン (Balik Papan) に至るもの 直徑五吋 延長六十五哩
- (六) ボルネオに於けるサンボジャ (Sanbodja) からバリックババン (Balik Papan) に至るもの 直徑五吋 延長三十哩

製品を各地に輸送するには、油槽船を使用して正味輸送をなすもの、石油罐に收

めて輸送するものも亦少くない。

蘭領東印度の鑛業法規の概説

蘭領東印度の鑛業法規には、舊法と新法とあつて、舊法は一千八百九十九年の制定に係り、同年の九月二十六日(官報第一二四號)を以て公布せられ、一千九百七年から實施せられた。新法は、舊法の改正案が、一千九百十五年に、和蘭の議會に提出せられ、一千九百十八年の五月、上下兩院を通過し、同年七月二十日(官報第四六六號)を以て公布せられたるものである。而して舊法と新法とは非常な逕庭がある。新法實施以前に舊法に依つて、鑛物の試掘採掘を許可せられたるものに對しては、既得權を尊重して、從來の通り舊法が適用せらる。新法では未開の油田は、政府が全部之を保留し、政府自ら試掘をなすか、若くは政府が契約したる人、又は會社をして、石油の試掘採掘を行はしめ、又場合によつては、公の入札によつて最高額の現金を提供するものに、石油の採掘を許可することゝなつた。

而して其公の入札に關する規定は、勅令を以て定る事となつて居る。

舊法によれば、鑛物を採取せんとするものは、先づ試掘免許を出願するを要す。其期間は三ヶ年であつて、其後一ヶ年宛二回迄、延期出願を爲すを得、試掘權所有者が試掘中鑛物を發見し、是れが技術的に採掘し得るものなる時は、其鑛物に對して、滿七十五箇年の採掘權を許可せらるゝの規定であつた。

然るに新法では、第一條に於て鑛物の種類をA Bの二種類に分ち、Aに屬するものを、一般金屬物其他とし、Bに屬するものを無煙炭各種の有煙炭及褐炭、石油、アスファルト、石蠟、固體老くは液體の各種瀝青質物、上部層内に在らざる可燃質瓦斯、沃度及其化合物と限定して居る。又新法の第五條には、試掘又は採掘の既得權所有者の權利と牴觸せざる限り、政府は何れの地に於ても、其試掘及採掘をなす權利を有し、此目的の爲めに、政府は自から、試掘及採掘をなし、又は個人若くは會社と契約を結び、之をして試掘及採掘を爲さしむる事を得、此の

如き契約は、専ら試掘のみを引受くる契約を除きては、各個の事件に就て締結する事を、政府が法律を以て許可する迄、締結するを得ずと規定してある。又新法の第二十八條には石炭、石油、アスファルト、石蠟、瀝青質物、可燃質瓦斯、沃度及其化合物、即ち第一條のBに屬する鑛物は、試掘によつて發見したる際、發見者に採掘權を賦與せず、唯政府、又は政府が契約したる個人、若くは會社のみ、該鑛物を採掘する權利を有し、右發見に對する報酬は、特別の契約なき限り、總督之を定むと現定してある。而して政府から石油其他、即ちBに屬する鑛物の試掘權を得る資格者及、此等の鑛物の採掘權を、政府との契約によつて附與せらるゝ資格者は、和蘭人若くは蘭領東印度の住民、和蘭若くは蘭領東印度に設立せられ、重役の過半数が和蘭人若くは、蘭領東印度又は和蘭に現に住所を有する、蘭領東印度の住民たる法人に限られて居る。

此外にも、新法と舊法には差違があるが、概して云へば、Aに屬する一般の金

屬其他の鑛物に對しては、略舊法と類似の規定を適用し、Bに屬する鑛物即ち石炭、石油及沃度等に對しては、舊法と大に異りたる規定を適用する事となつて居る。

重なる石油會社

ローヤルダツチ、シエル合同會社並に其隸屬會社 蘭領東印度に於て石油業に従事して居る會社はローヤルダツチ、シエル、シンヂケートの蘭領東印度の石油業の經營に當つて居るバタフシエ石油會社及其隸屬會社であつて、此外に若干の獨立會社存するも殆んど云ふに足らざるもので、事業上蘭領東印度の石油業はローヤルダツチ、シエル、シンヂケートの獨占と見て差支がない。

ローヤルダツチ會社は一千八百九十四年に和蘭に於て資本金百十萬フロリンを以て創設せられたる會社で、原名を Koninglijke Nederlandsche Maatschappij tot Exploitatie van Petroleum Bronnen in Nederlandsche Indie と云ひ、其の英譯は

Royal Dutch Company for the Working of Petroleum Wells in Dutch Indies である。普通原名をコーニングクリツケ、ニードルランヅ、マーシャツビーと云ひ其英譯をローヤルダツチ、コンバニーと稱す。創立當時はゲルダー氏(Mr. G. A. de Gelder)が常務取締役たりしが、程なくケツスラー氏(Mr. G. B. Kessler)之に代り、一千八百九十二年にスマトラの石油鑛區に對して試掘を開始した。同氏は補助者の必要を感じ、當時爪哇のパタピア銀行員であつたデターディング氏(M. H. W. A. Deterding)を聘したるも、當時尙創業當時代であつて其經營は困難であつて、ケツスラー氏は一千九百年に遂に卒去した。是に於てデターディング氏は同會社の常務取締役として彼の地位を繼承するに至つた。

シエル會社とは一千八百九十七年に英國に於てマークス・サミュエル氏に依つて創設せられたる、シエル、トランスポート、アンド、トレーディング、コンバニー (Shell Transport and Trading Company) の略稱であつて、初め倫敦の近傍に

於ける貝殼業の經營を營んで居つたが、事業の發達と共に貝殼に代るべき適當の商品を尋ねて遂に石油を撰定した。最初は印度、支那及日本等に對する燈油輸送及販賣を營業とせしが、自社の産油を有せざる爲め活動意の如くならざりしが、其後ボルネオのサンガサンガ油田を開發し、充分に産油を得るに至つた。當時ローヤルダッチ會社は主としてスマトラ島に事業を經營して産油は充分にあつたが、一隻の油槽船をも所有せず、シエル會社はローヤルダッチ會社にとつては眞に恐るべき脅威であつたが、此に於てローヤルダッチ會社の社長デターディング氏は一千九百三年を以てシエル會社並は露西亞に於て石油業を經營しつゝあつたロスチャイルド氏一族の事業と聯合を形成して、三會社が各自に採掘する石油の一手販賣に従事せしむる爲めに、新にアジアチック石油會社なる一販賣會社を創設した。其後ローヤルダッチ會社はスマトラに於ける南ベルラタ石油會社、ムアラエニム石油會社及スマトラ、バレンパン石油會社を買收してスマトラ島の石油

事業を全部自社の掌中に收め、シエル會社はタラカン島の油田を開發し兩社共に大發展し、遂に一千九百七年に至り兩會社は左記の條件の下に合同するに至つた。

- 一、ローヤルダッチ及シエルの兩會社は個々に在するも、其資産は擧げて新設の會社に引繼ぐ事。

- 二、新設會社は一を和蘭に設立しバタフシエ石油會社と稱し、他を英國に設立し、アイングロ、サクソン石油會社と稱し、前者は産油及製油に従事し、後者は前者の製品を買收して之を運搬貯藏及販賣するの任に當る。

- 三、兩會社の資本中六割はローヤルダッチ會社にて出資し、四割はシエル會社にて出資す、其資本金はバタフシエ石油會社は一億四千萬フロリン、アングロ、サクソン石油會社八萬磅である。

如斯合同して後もアジアチック石油會社は之を存し、合同會社が産出並に精製せしものを販賣する事となつた。而してバタフシエ石油會社は蘭領東印度に



於て専心油田の開発、石油の産出精製に當り、一千九百十年にはボルネオに於てはサンガサンガ油田の西南に在るサンボジャの油田を開發し、又同年に一名シャムハイ、ランカット會社と稱する石油會社を買收し、其翌年即ち一千九百十一年には爪哇のドルツ石油會社の株券を買收して該會社を管理するに至り、蘭領東印度の石油業を殆んど其の手中に收めた。シヤンハイ、ランカット會社は本名を *Mantschappij tot Mijn Banch en Landbouw Exploitatie in I angkat* と稱する會社で一千八百九十四年に資本金貳百五十萬ギルダを以て創設せられ、ランカット地方のタンジョンブラー (*Tandjong Poera*) 附近の油田から原油を採收して、タンジョンブラーに製油所を設けて之を精製して居つた會社である。ドルツ石油會社は蘭領東印度に於て最初に設立せられたる石油會社であつて、一千八百八十七年に資本金僅かに七萬五千ギルダを以て創設せられ、スラバヤ附近の油田を開發し、一千八百九十年に其資本を參拾萬ギルダに増加し、ヲノクロモの製油

所を完成し、其後レンバン州に於ても石油の採掘に着手して大に成功し、一千八百九十四年にチエブーに第二の大製油所を建設し、一千八百九十六年に至り更に第三の製油所をスマランに設置して資本金を二百萬ギルダに増加し、且爪哇レンバン州産の原油は溶融點高きパラフィンを多量に含有するが故にチエブーに別に製蠟工場を新設し、續いて蠟獨製造所を建設し蠟燭特に熱帶地方の氣候にも適する蠟燭をも製出し始めた會社である。

而してパタフツシエ石油會社は數回の増資を行ひ、今や參億フロリンの資本を擁し、爪哇スマトラ、ボルネオの各地に直接若くは隸屬會社を通じて廣大なる稼行鑛區を所有し、前述せる六大製油所及送油鐵管線を所有し、其生産品の蘭領東印度内の輸送及販賣はドルツ石油會社に委ね、外國の市場即ち歐羅巴、阿弗利加印度、濠洲、支那、日本等に對しては、其輸送はアングロ、サクソン石油會社が司り、其販賣はアジアチック石油會社が其任に當つて居る。アングロ、サクソン

石油會社は最初其資本金は八百磅なりしが今や千六百磅の資本を擁し、アジアチック石油會社は左記十會社に分れ居つて歐洲、阿弗利加及東洋各地に製品の販賣をなして居る。

會社名	資本金
一、アジアチック石油會社	四、〇〇〇、〇〇〇磅
二、アジアチック石油會社(セイロン)	三〇〇、〇〇〇
三、アジアチック石油會社(埃及)	一、〇〇〇、〇〇〇
四、アジアチック石油會社(馬來聯邦)	一五〇、〇〇〇
五、アジアチック石油會社(印度)	二、〇〇〇、〇〇〇
六、アジアチック石油會社(北支那)	二、〇〇〇、〇〇〇
七、アジアチック石油會社(南支那)	一、〇〇〇、〇〇〇
八、アジアチック石油會社(フィリッピン)	二〇〇、〇〇〇

九、アジアチック石油會社(シヤム) 二〇〇、〇〇〇  
 一〇、アジアチック石油會社(海峽殖民地) 七五〇、〇〇〇  
 我日本に於てはアジアチック石油會社の分身であるライジングサン石油會社が販賣の任に當つて居る。

而して現今ではローヤルダッチ、シエル、シンジケートは露西亞、埃及、北米合衆國、墨西哥、トリニダット、巴奈馬、ヴェネツィラ等の諸國に於て石油事業を經營し、此等の諸國に有力する隸屬する會社を有して居るが、蘭領東印度に於ける事業が最も大なるものである。

斯くローヤルダッチ、シエル、シンジケートが世界各地に其絶大なる勢力を張り、ローヤルダッチ會社現今六億フロリンの資本を擁し、シエル會社は現今四千三百萬磅の資本を擁するに至れるは、一はローヤルダッチ會社々長デターデング氏、シエル會社々長サミエル氏の非凡なる手腕に歸するも、他は和蘭及英國政府

の直接間接の庇護に因ると云はなければならぬ。

ニーデルランツシエ、コロニヤル石油會社 米國ニュージャージー、スタン  
 ガード石油會社は蘭領東印度の石油業に着目し、一千九百十年の後半に於てアメ  
 リカンシエ石油會社の名の下に蘭領東印度に現はれ、本部を爪哇パタビア市に置  
 き一千九百十二年四月迄に爪哇及スマトラに於ける多數の石油鑛區を買収し、總  
 ての豫備調査及會社組織の業務を完成し、是に於て前記アメリカンシエ石油會社  
 を解散して、其の代りに同年五月八日和蘭國會社の法規により資本金貳千五百萬  
 ギルダのニーデルランツシエ、コロニアル石油會社 (Nederlandsche Koloniale  
 Petroleum Maatschappij) を創設するに至つた。

爪哇に於ては一千九百十二年の初期にレンバン州に試掘を開始し、昨年に至る  
 迄に三十餘坑を掘鑿し、ベタタ及トレンブールの二油田を開發せり。

北部スマトラに於ては一千九百十四年タミアン州に試掘に着手したるも出油の

見込なく廢坑するに至り、又アチエー方面に得たる試掘認可地は地質技師の調査  
 の結果掘鑿の價値なきものと認め之を廢棄せり。

南部スマトラに於ては一千九百十四年バンバン州に試掘を開始し、六ヶ所の  
 鑛區に掘鑿せる結果、タランアカル及マンパンの兩油田を開發せり。

ボルネオに於ては一千九百十四年英領北ボルネオの全部の試掘權並に蘭領ボル  
 ネオ南部及東部の試掘鑛區を獲得し、大に試掘を行ふた。英領ボルネオに於ける  
 鑿井事業は四ヶ年に亘つて六坑を掘鑿し且此地方全部に亘つて精細なる地質調査  
 を行ひ、其結果有望ならずと認め遂に一千九百十八年に試掘權全部を放棄し、使  
 用したる諸機械は悉く之を蘭領ボルネオのサマリダに移動せり。蘭領ボルネオ  
 に於ける鑿井事業は獲得油田全部に於て鋭意掘鑿を繼續し、試掘鑛區の多くは出  
 油及瓦斯の噴出を見たるも、目下は此等の掘鑿を繼續するの得策ならざるを認め  
 一時事業を中止し居れり。

本會社が蘭領東印度に入り込みたる重要な理由の一はスマトラ島のジャンピ州の油田の掘鑿権利を得んが爲めである。同州の油田は次項に於て述ぶるが如く蘭領東印度中最も有望なりと思惟せられ、本會社も本油田の獲得に就て大に運動したるも政府は全然之を許可せず、久しく之を保留したる後遂に次項に於て述ぶるが如く政府自から之を開發する事となつた。従つて本會社は今尙事業を繼續し居るも、多大の資金を投じたる割合に未だ十分に發展する能はざるの状態にある。

**蘭領印度石油會社**　蘭領東印度スマトラ島の東南部に於けるジャンピ州に在る含油區域を總稱してジャンピ油田と稱す。蘭領印度政府は地質技師エー、トブラー博士 (Dr. A. Tobler) を主任として約六年間に亘りジャンピ州の含油區域を精細に調査せしめたる結果、同州に有望なる左記四十四油田の存在が發見せられた。

ジャンピ州西南及東北部油田

- 一、ジエラベン油田 (Djelapang)
- 二、アエール・メルーフツプ油田 (Ajer Meroewap)
- 三、ブラヤン・セムート・ジエライト油田 (Plinjang Semoet-Djelait)
- 四、セカミス油田 (Sekamis)
- 五、テリサ油田 (Tilisa)
- 六、タナー・アベン・ベムーシラン油田 (Tanah Abang-Pemcesiram)
- 七、ケタローマングール油田 (Ketalo-Manggoel)
- 八、ケチドウーラン・ブータン油田 (Kekidoeran-Boetang)
- 九、カパス油田 (Kapas)
- 一〇、ジャンガ油田 (Jauंगा)
- 一一、ベンジャロカン・スーングイ・ブーギン・ムアラ・バドック油田 (Pondjarukan-Suengei Boengin-Moeara Badok)

- 一二、イブール油田 (Iboel)
- 一三、メルロー・セナミ油田 (Meroeo-Senamii)
- 一四、パヨ・ナレガ・テミダイ・メンカンデイン油田 (Pajo Ngalega Temidai Mengkanding)
- 一五、ブーアヤン・ブールー油田 (Boenggan-Boeloeh)
- 一六、ランベイ・ベツーン・セトボク油田 (Rambi-Batoeng-Sembio)
- 一七、ケヒランガン・バシユースン油田 (Kehilangan-Batjoebang)
- 一八、テンピノ油田 (Tempino)
- 一九、ケナリアツサム油田 (Kenali-Assam)
- シヤムビ州中部油田
- 二〇、バタンニロ油田 (Batang Nilo)
- 二一、ランタウ・ラウマ・ヤニス油田 (Rantau Limau Mamis)

- 二二、イヌーム・バンドウーン油田 (Inoem Bandoeng)
- 二三、ゲヂル油田 (Geger)
- 二四、メルサム油田 (Mersam)
- 二五、セリアンセラランチ油田 (Serian-Selangai)
- 二六、アプーラン・クロービュー油田 (Aboeran-Koempih)
- シヤム州西北部油田
- 二七、レンガス・キリス油田 (Rengas-Kilis)
- 二八、スーマイ油田 (Soemai)
- 二九、メラウエー油田 (Melaweh)
- 三〇、カラン油田 (Karang)
- 三一、ジエンキン油田 (Djengkling)
- 三二、チンペカン油田 (Tjimpagan)

- 三三、グルームバン・ベザール油田 (Gloempang Besa)
- 三四、スールト油田 (Soeroet)
- 三五、ペメリアン油田 (PeMerian)
- 三六、センタノ油田 (Sentano)

ジャム州北部油田

- 三七、シングカチ・サンガラン油田 (Singkati-Sanggalan)
- 三八、カヒドウーパン油田 (Kalidoepan)
- 三九、サングキラン油田 (Sangkilan)
- 四〇、ペナナ・シンゴアン油田 (B-nana Sinean)
- 四一、ルーブーク・レスーン油田 (Loeboek Lesoeng)
- 四二、スーパン・トラン・ヂタン油田 (Soeban trang Djan)
- 四三、ペマタン・ランチ油田 (Pematang Lantih)

四四・ツウーベ、オビ油田 (Toeba obi)

ジャムビ州には以上四十四油田があつて其油田面積八三二〇三エーカー即ち一億百七十萬八千七十二坪に及び、其多くは有望油田にして蘭領東印度の油田中では勿論随一の油田である。之が開發せらるゝ場合には世界に於て有数の良油田となるものと一般に想像せられて居る。且同州の油田は地勢上地形上採掘頗る容易であるから、起業の曉には其利益莫大であると云はれて居る。斯るが故にジャムビ州のコンセッション獲得に關し競争頗る激烈を極め、租借出願者の數二千以上に達せりと云ふ。是に於て政府はジャムビ油田開發に關し其方針を確定する爲め、一般民間企業者に對し同油田のコンセッションを許可せず、將來に於ける東印度の一大資源として之を政府が保留する事となつた。唯にジャムビ州の油田のみならず蘭領東印度の未開の油田は悉く一千九百十三年以來政府が之を保留し、民間企業者に其コンセッションを許可せざる事となつた。其後一千九百二十年に至つて政

府は蘭領印度石油會社法案を提出し、該法案は一千九百二十一年七月二日上下兩院を通過したるを以て、政府は蘭領印度石油會社 (Nederlandsche-Indische Aardolie Maatschappij) を組織して之をしてジャムビ油田の開発をなさしむる事となつた。然し本會社の經營は政府管理の下に政府と密接の關係あるパタフシエ石油會社に委任せらるゝのである。而して蘭領印度石油會社の内容は左の如くである。

- 一、會社の目的　蘭領印度スマトラ島ジャムビ州の油田に於ける石油、アスファルト、石蠟、可燃性瓦斯、沃度及其化合物の掘採並に其生産品及此等の生産品より製出せられたる製品の販賣。
- 二、會社の資本及株式　資本金は設立當時壹千萬ギルダにして之をA B各五千株に分ち一株の金額を壹千ギルダとす。各株式には所有者の姓名を記載す。

創立後直ちに各株式金の一割を供託し、其以後は重役會の意見により必要に應じて拂込むべきものとす。

A株式の所有者は絶対に蘭領印度に屬する法人たるべきものとす。

B株式の所有者は會社を設立したる一人若くは多數の人たるべし。B株式を移轉する場合には殖民大臣の許可を経るを要す。

三、會社の重役及重役會　蘭領印度石油會社は重役會之を管理す。此重役會は殖民大臣に依り例外を許可せらるゝにあらざれば、絶対に和蘭國民以外の國民を以て組織するを得ず。

#### ジャムビ油田に對する米蘭の紛争

米國ニュートジャーシー・スタンダード石油會社が蘭領東印度に於てニールラシエ、コロニアル石油會社を設立したる眞の目的はジャムビ油田の石油採掘の利權を得んが爲めであつた事は既に述べたる如くである。然るにジャムビ油田

は一般民間企業者の試掘及採掘を閉鎖せられ久しく政府に依つて保留せられしが前述せる如く千九百二十年に至り東印度政府とパタフシエ石油會社との協同資本を以て同地方の油田開發を目的とする蘭領印度石油會社法案が議會へ提出せられ、先づ下院を通過し次で昨年七月二日上院を通過した。此の蘭領印度石油會社は官民協同事業と云ふも其實質はパタフシエ石油會社に監督付採掘權を許可したるものである。スタンダード石油會社は蘭領印度石油會社法案が議會へ提出せらるゝ以前に、蘭國政府に於て斯る計畫あるを探知し、米國政府に協議したる結果米國政府は駐蘭米國公使ダブリー、フイツツプ氏をして蘭國政府に向つて其油田經營政策に就て強硬に抗議せしめ、門戶開放機會均等を主張し、蘭領東印度の油田開發に關し米國資本を他の外國資本(米國資本を指す)と同等の立場に於て參加を許されん事を要請し、若し飽く迄之を拒絶するに於ては米國は止むを得ず、米國油田に投下せられたる和蘭資本即ちカリフォルニア、オクラホマ、ルイジアナ等

の各州に投資せられたるロイヤルダッチ、シエル會社の經營に係る諸會社を驅逐すべしと威嚇せり。而して米國の強硬なる抗議に對しては蘭國政府の外務大臣フアン、カルネベーク氏が一々回答し大に辯明に努めた。其詳細は海軍大佐松岡靜雄氏によつて米蘭油田紛議の真相と題して先般發表せられた。兩國間の抗議應答は實に細に入り徹に入り論法鋭きものがある。

米國の抗議の要領は大略左の如くである。

蘭領印度の最良含油地域の全部に亘る特許を一會社に與ふことは其理由の何たるを問はず、外資排斥の一端と見ざるを得ず、全世界石油問題解決法として、最も望まじき機會均等主義を累するものと云ふを憚らないのである。

合衆國政府の要望は主要なる天然資源の利用について米國及他國人が相互參加することの承認を來むるにありて、將來の世界石油問題の解決案はこの機會均等主義の採用にあるのみと信ず、合衆國が多年他國の消費する石油の大部分の



供給を擔當せること、蘭國資本は米國油田投資の自由を有したりし事、並に他の需要を充す爲め自國の資源を開放せること米國の如きは類例を見ざる所である。合衆國政府は曾てジャムピ油田に對する米國資本參加に關する蘭國女王殿下の好意的態度に就て萬國外務大臣及殖民大臣より保證を與へられたので、米國政府は米國の或會社の爲めに動くものではないが、過去十二箇月間になされたる具體的施設を見るに米國の經驗あり且責任ある事業家は蘭領東印度に於ける油田開發の爲めに和蘭政府と協同するの證左顯然たるものがある。米國の學者及石油専門家にして印度の源泉を知悉せるもの、説によれば、ジャムピ油田は蘭領印度に於ける石油資源の主體なりと云ふに一致す。此故にバタフシエ石油會社との契約法案は事實に於て蘭領東印度に於て知られたる最富裕鑛區開發の獨占權を米資以外の外國資本(即ち英國資本)が多額に投下せられたる一會社に附與するものである。斯く米國資本の參加を禁ずるは何故なりや。

之に對する蘭國政府よりの回答の要領は左の如くである。

米國政府は機會均等相互主義を主張せらるゝも、現に一千九百二十年五月二十五日發布の法律によれば外國にして多少にても制限的規定の存する國及其國人には其事項の何たるを問はず、米國々有地に於て企業するを禁じ、且比律賓の立法も亦石油開發に關し米國の相互主義と矛盾するものに非ずや。蘭領東印度石油會社を設立し其經營をバタフシエ石油會社に委託するの法律案は既に議會に提出済のものであつて、議會に於て尙論争中なるも、主義に於ては既に確定事項であつて、其後に於て利害關係者の一團から他の解決法を提出せらるゝとも政府は之を問題とする事が出來ないのである、而して該法律案の目的は決して蘭領東印度石油の獨占權をバタフシエ石油會社に與ふるものに非ずして、會社によつて殖民地の利益に反する此の如き獨占の行はるゝを阻止するものである。

ジャムビ油田以外に尙幾多の重要な産油地域存在するが故に他の會社も亦目下討議中の法案と同一の様式若くは多少變改せる形式を以て政府と契約を締結する事が出来るのである。ジャムビ油田は蘭領印度産油地域の最後のものではないのである。

蘭國殖民大臣は下院に於てジャムビ油田以外の油田の開發の時機も恐らく遠きことにはあらざるべく其場合にはバダフシエ石油會社以外の諸會社も亦之が企業に携はることを得べしとの暗示を與へ居る事及び印度富源開發に就ては外人又は外國資本を排斥する事の不可なる旨を聲明して居る事に御注意願ひます。

## 南洋の蘭科植物に就て

子爵相馬 孟嵐

### 蘭の原産地

今回約半年を費しまして、南洋方面を旅行致しましたに就て、本會の理事の御方よりは是非何か講話をするやうにといふ御命令がございましたけれども、私は南洋に参りましたのは今回が始めてとありますので、南洋に對しまする知識はハンの小學生同様の者であります。それが此南洋通であられる皆様の前で御話を致しますといふことは、甚だ潜越のことでありませうけれども、理事の井上さんから何か會員の義務として専門の話をしろといふ嚴重の御命令でありますので辭し難く遂に此の演壇に立つた次第であります。私は蘭科植物の事を研究して居りますか

ら、其方面で今回旅行致しました、彼の地方の蘭科植物に付て見たり或は聞いた  
り致したことを申し上げやうと存じます。まだ併し材料が充分でありませぬ。研究  
が届いて居りませぬから、間違つたことを申し上げたり、或はつまらないことを申  
上げるかも知れませぬ。又性來訥辯でございまして話が前後致しましたりして、  
皆様が御倦になるやうなことがあるかも知れませぬが、其點は前以て御許しを願  
いたいと思ひます。

私が今回旅行致しました目的は、蘭の原産地に於ける生育状態と、其外界の状  
況、又各地に於ける蘭科植物をどういふ風に採收して居るか、どういふ風にそれ  
を商賣として居るか、或は熱帯ではどんな風に栽培をして居るかといふことを大  
體見て來たいといふのが主眼なのでございまして、それで出來れば採收もし、又  
宮内省の新宿御苑に栽培を致します蘭科植物を購入する目的で、比律賓群島を振  
出しに致しまして、それからボルネオを通りまして、マレイ半島、緬甸、印度、

爪哇地方を廻つたのでございます。既に御承知の方も御出で、ございまして、申  
上げる必要もないかと存じますけれども、蘭科植物といふものは大體どんなもの  
かといふことをちよつと申げて置く方が宜くはないかと思ひます。

#### 蘭の種類

大體花の咲く植物を二つに分けてあります。一方を單枝葉、一方を双枝葉と申  
します。双枝葉の中で蘭科植物が一番發達し種類が多く、複雑なもので、世界到る  
處に廣がつて居ります。一方の單枝葉も亦蘭科が一番發達して居つて、非常に種  
類が多く、熱帯温帯寒帯を通じて分布して居り、只今では人工種類を入れますと、  
約十萬近くになつて居る状態でございます。花も種々種類がございまして、虫媒  
花であります故蟲の注意を惹くやうな構造になつて居ります。色彩の綺麗な或は  
香ひがあるといふのは皆蟲の注意を惹く爲めであります。さうして面白いことに  
は、普通の種子のやうに自分自身の種子の力で發芽が出來ず、或一種の菌類が居

りまして、是が種子の中に喰ひ込んで参りますと、菌類から出すエンチームの作用で、中に養分を蓄へまして、其刺戟と榮養分で發芽をするのであります。此の様な特色のある植物でございます。是等の澤山ございます蘭を大體二つに分けますと、植物學的に興味のある蘭、翫賞用に適する蘭、と致します。前者は花などは美しくなくても、種類とか屬が非常に珍しければ宜しいが後者の翫賞の部類に屬するものは、花が美しいとか、或は花形が大きいとか、香ひがあるとか、それから葉が綺麗であるとか、或は非常に珍しいとかいふ、色々な條件が具つて居らなければなりません。又實用と申しますと一寸變でございますが、翫賞用に對しまして尙ほ實用に適するものとなりますと、花が矢張り綺麗で、大きくて、それから莖が長いといふことが一つの條件になつて参ります。それは莖が長いのがなせ必要かと申しますと、切花にして花瓶に差して置くとか、食卓の上に盛花として置く爲めであります。それからもう一つの條件としては培養が簡單で、容易に

花が咲くといふことであります。さうなります多くの種類がございますけれども、少數に限られるのであります。私が今回旅行致しましたのは、植物學といふ立場より、寧ろ翫賞用の蘭の産地を、ズット見て参つたのでございます。

#### 蘭の分布

少しく蘭の分布に付いて御話し致しますと、蘭の多いのは矢張り熱帯地でございます。殊に南米、中米であります。其地方には又美しい、翫賞用として立派なものがございます。又一方は東洋方面で、印度からアッサム、緬甸、馬來を通じまして、スマトラ、爪哇、ボルネオ、ニューギニア、又暹羅から南支那を通つて、比律賓に至る地方に多く大體南中米と東洋に分れて居ります。併し此外にもまだマダスカルとケープタウンの邊にもあり、北米にもあり、錫蘭にも亦少しございます。是はどうしてさういふ風な部分に限られて居るかと申しますと、雨量と湿度といふことに可なり大事な關係があるやうでございます。それは此雨量圖で見

ますと、矢張り湿度が高く、雨量の多い所が蘭が多いのでございます。南米の方はコロンビヤ、ブラジル、ペルーの南西部の山脈に海から濕氣を含みました風が當りまして、そこに冷却し雨が非常に降るので、其地方に多く。東洋の方でも其一例を申しますと、ことにヒマラヤからアッサム、緬甸の山脈の高い所に濕氣を含んだモンスーンがありまして、そこで冷却される爲めに此の邊は雨量が多いのであります。面白い例は、錫蘭の西部の半分には蘭がありますが、東半部には殆んどないのであります。此處は全く半分に限られて居る。著しいのは印度で之れが能く分ります。東洋では一番何處が多いかと申しますと、ビルマ、アッサム地方が、其種類も數も非常に多いのでございます。其次は比律賓に可なり多うございますし、それから印度のヒマラヤ地方にもサイアム、アンナム、ニューギニヤにも大分あります。それからボルネオのサラワツク近邊、スマトラにも少しはあり、爪哇にもあります。此の如く非常に廣く分布して居りますが、其種類は決し

て同じでございませぬ。地方々々に依つて可なり特有なものがあります。一例を申上げますと、臺灣に胡蝶蘭といふのがございますが、夫れと同様の桃色の色の花が比律賓にあります。外のは何處にもなく比律賓の呂宋の或一部分にしかないのであります。

#### 比律賓に入る

それから矢張り胡蝶蘭のやうな花でございしますが、これはニューギニヤが主な原産地であります。それから緬甸にも餘程特有なものがございます。又爪哇にも特有なものがある。大體に於て東洋の方の産地はどういふものがあるかと申しますと、石斛即ちデンドロビウム類と、パンタ類と申して、葉が對生たいせいになつて居り、花は餘り大きくはありません。又敦盛草とか熊谷草とか申して居る所のシブリベジウムの類は、東洋に限られて居ります。其他日本の駿河蘭とか春蘭とかいふもので、シンピデウムと申しますのは東洋獨特のものでございます。其他獨特のも

のはございますが、大體から申しまして、東洋の方のものと南米の方のものと異つて居ります。私が今度参りました地方で特に御話するのは比律賓と緬甸でございます。是から私の参りました方面の御話を申し上げやうと思ひます。

私は丁度拾年の二月十三日に東京を立ちまして、それから神戸を十六日に出まして、上海に寄り、香港に寄りて、比律賓に渡りました。香港の御話をちよいと申上げますと、香港も熱帯の部類に這入つて居りまして、蘭が多分あります。それから厦門の近邊にもありますが、略しまして直ちに馬尼刺の御話を致します。馬尼刺に上陸致しましたのは三月の十四日でありました。馬尼刺市には蘭を採收して各地に輸送して居る者が三人居る。それは日本人が一人と、米人が一人と、比律賓人が一人であります。私は其日本人と前から知つて居た者ですから、其人を頼りまして、來意を告げ、比律賓の蘭に付て種々尋ねました。特に有名な桃色の胡蝶蘭の産地を見たいといふことを頼みました。其他平原の森林と、それから

二三千尺の森林と、それから一番高い山に登つて大體の模様を見たいといふことを話しまして、其用意をしたのでございます。

#### マノン山上の酋長

先づ第一に胡蝶蘭の産地でございますタイヤバス州にマノンといふ山があります。其原始林を見に参ります事に致しました。先づ朝早く停車場に参りして、グマカといふ小さい停車場迄の切符を求めました。私はこちらから連れて参りました者と、蘭を輸出して居る宮崎君といふ人と、比律賓人の通譯を連れて、都合四人で馬尼刺を出ました。さうすると汽車の中で食糧の鞆を持つて参りましたが、非常に蟻が附いて困りました。其蟻を見ると砂糖を甜めないで、バターとハムに非常に附いて居ります。それからハセナといふ所で或日本人が突然に乗つて参りまして、挨拶もせず、いきなり日米戦争はいつ始りますかといふ質問を受けました。是には非常に困りましたが、そんなことは決してないといふことを話して居

る中に降りて仕舞ひました。其人は七年程前に山に這入つたり日本人に會はないさうで、比律賓人は日米戦争が今にも始まるやうに考へて居るといふことを話しました。それから夕方グマカといふ停車場で降りまして、其村の比律賓人の家に泊りました。それから翌日馬を六頭揃へまして、食糧寝具等を馬に積みまして、五里程山の中に這入りました。其處はマノンといふ山でございますが、高さは約三百尺から五百尺位の程度のものでございますが、昔から一度も斧を入れない森林がありまして、其處に胡蝶蘭類があるのでございます。少し雨の降つて居る中を馬に乗りまして、其マノカに夕方着きました。山上には會長が居りて、ネグリーとかアイターとかいふ蠻人を統御して居ります。我々は其會長の家に泊りましたが、非常な款待を受けまして、何年來開けたことのないといふお茶を態々飲まして呉れましたが、それは臭くて逆も飲めないであります。

### 比律賓人の生活

御承知の通り比律賓人の家は竹と椰子とで出来て居りまして床は竹で地上四尺ぐらゐ高く土人皆土足のまゝで猫も犬も同居であります。下には鶏と豚を飼つて居ります。夜になると犬も猫も鶏も人も同じ竹の床に集まります。下には豚がブウ／＼云つて居り毛布一枚を擴げて横になりましたがなか／＼眠られませんでした。翌日早く起きまして、アイタイ人の眞黒な奴を呼びまして煙草を一本宛やり、酒を少し宛飲まして、それを連れて山の中をズット廻りました。此邊は可なり蘭があることが知れて居りますから、濫採致しまして殆ど無いと云ふてよいくらいで私共は約二十しか取れませぬでした。併し大體が森林の模様を知つたことが非常に参考になりました。一體に比律賓は御承知のやうに、十月から一月頃は餘り雨が降らないのでございますが、此處は特に地勢の関係で、十月から一月頃がかなり雨量が多いやうでございます。あとは割合に平均して居ります。呂宋の中でも此邊は濕氣が多いから、森林に這りますと可なり陰濕で、温度は丁度一番高

い時が八十五度で、夜になると十七八度位でございました。森林の様子は常緑樹が多うございまして、籐葛が攀援して居りまして我々が這入りますには蕃人が前に立ちまして、大きな蠻刀で籐蔓を切りまして這入つて行くのであります。蘭はどういふ所に生へて居るかと申しますと、矢張り常緑樹の百尺位の高さの木の下から六十尺位の位地に一番多うございまして、それを取りますには、土人が蔓を引張つて見て、それが自分の身を支え得る位の強さでございまして、それに捉つて上り、幹まで可なり距離が離れて居りまして、ぶらんこの様に振つて其處まで達して取ります。實に危険で、逆も人間業ではありません。それ故に其邊には一般に採收する人は行かないで、土人に言ひ付けて、若しお前達が斯ういふ蘭を持つて來れば、米なり燐寸なり、赤布なり、酒なり、煙草なりをやらうといふと、土人が取つて來る。それを集めて比律賓人が宮崎君の處に賣り更に日本、米國、英吉利に送られるのであります。現今は此の蠻人共が一週間も深く山に入らなけ

れば多くの植物を得られまいさうであります。

#### バギオからモンタルナへ

其處は四五日で歸りまして、馬尼刺から新にバギオに參りました。バギオは五千尺位の高さで、蘭は澤山はありませんが、バギオから六十基米突位の八千六十呎のヘイツ、ブレースに登ることに致しまして、矢張り馬を雇ひまして、私と同行の者と宮崎君と、バギオに居ります早川君と、それから比律賓の通譯とで馬に乗つて參りました。先づ初日は三十基ばかり參りまして、其途中寫眞を寫しましたり、蘭を採收致しましたりして、三十基の所に泊り、其翌日丁度六十基米突迄ある所に參りました。其間に蘭がかなり澤山あります。バギオの邊は殆んど松の本ばかりであります。其上に行きますと松の木が少くなりまして、途中で潤葉樹林になります。ズット上に行きますと温度が低い爲めに木が育たないで低い森林があります。温度はバギオに私の參りました時は最高七十八度から六十七八度位



でございました。それマズフト上に行きますと、三月の二十五日に日中が六十六度で、夜間は三十五度迄降りましてストーブを焚き毛布を四枚掛けて寝ました。其三十五度の所に蘭が澤山ありますには驚きました。それなどを採收致しまして、約一週間ばかり掛つて歸りました。此邊の雨量は多く、二百二十吋位平均降るさうでございました。比律賓第一になつて居ります。種類を申し上げますと、バギオの邊は餘り綺麗なものはございませぬが、シプリベデム類のもので、比律賓特有なもの二三種でございませぬ。それもセロギン類石斛の類などが多いのでございませぬ。

バギオから、馬尼刺に歸りまして直ぐ、モンタルナといふ水源地に参りました。其平原の道を二十七八哩自動車で参りまして、それから川を徒渉して、三里程奥に這入りました。此處は大分取盡されまして、採つた迹はございませぬが、蘭は餘りないので失望致しました。此の平原には矢張りエーリデス、ネンドルビニウム

(石斛類)が多いのであります。其他種々小さいものもございませぬが、綺麗なものは其二つ位しかございませぬ。氣候温度は馬尼刺と同じく熱いのでございませぬ。大體から申し上げますと涼しい。高い所の方が種類が多いのでございませぬ。呂宋の蘭のございませぬ所は此の圖の如く點々として分つて居ります。比律賓の群島中他にも今迄分つて居ります所はございませぬが、大體に於て呂宋とミンダノンが一番多いのでございませぬ。

#### ダバオの胡蝶蘭

話が跡に戻りますが、馬尼刺の市中を歩きましても、アスブレニウム、ナイダスといふ羊齒を盛んに吊して居りますが、蘭などは餘り培養致して居りませぬでした。それから面白い話がございませぬが、前申し上げた蘭を輸出して居る者の内の一人が、或時タイムスに採收人を送りました所が、蠻人がどうしても言ふことを肯かない。自分が愈々出掛けて行きまして、木に登れといふことを命じた、で

アイダ人はどうしても登れないといふので、非常な勢ひで比律賓人と、二人で擲つたさうです。さうすると平常おとなしいアイダ人が大變に怒つて、妙な聲を出して山中に逃げて友達を呼んで来て毒矢を射つたさうです。こちらは短銃で防いださうですが、到頭山中にて毒矢に中つて死んで仕舞つたさうでございます。もう一つは、此邊の山には蘭が澤山あるさうで、私は今度も行きたいと思つたのですが、此山に這入ると殺されるといふ。なせかと聞くと、或時山からアイダ人が街に出て、比律賓人の女にからかつたのを比律賓人が非常に怒つて殺さうとした所が、山に逃げて舞つた。さうすると外のアイダ人知らずに町に出て來たのを殺したさうで、今度は比律賓人が山に登ると皆殺されるといふ譯で、到底其處には參れませぬでした。四月一日に馬尼刺を出航致してミンダナオ島のザンボアンガに渡り時日のない爲めにダバオに參らず近くのバシイラン島を見ましたが殆んど見る可きものはありません。

元來ダバオ附近は種類が多く、特有なものがございませぬ。種類は先程申し上げました胡蝶蘭の桃色と矢張り同じ類で、名前はサンデリアナ、及びステウアルテアヤ等が有ります。又ペンダサンデリアナ、デンドロビウム・テアレイ、エリデス・サンテリアナ等は此の島の特産であります。此の島を見る事の出來なかつたのは残念であります。以上申し上げたる比律賓産の蘭の輸出は主として、前に申し上げたる三人が致して居りまして、米國が一番多く、日本にもなか／＼澤山送つて居ります。我々が買つて居るのは皆馬尼刺からであります。それから英國にも參りますし、支那の方面、新嘉坡、印度方面まで大分送つて居ります。

#### ランゲンまで

サンボワンガを私は四月の六日に出まして、ボロに寄りまして、それからサンダカン、クダツ、セセルトン、ラブアン島及びミリに寄つて新嘉坡に出ました。ボルネオはまだ内部の方は到底危険で這入ることは出來ませぬ。併し此邊には餘

り蘭はないといふことを聞いて居りました。それはタワオで調べた人の話に據りますと、餘りないさうです。それはどう云ふ關係かと申しますと、雨量は可なりあるし、温度も可なり高いが、雨量が平均して居りまして、絶へず降つて居りまして、乾くことがなく、森林が良く繁茂致し過ぎますから、植物學的の蘭はあつても美しい花の蘭は、到底西部にはなく主にサラワツクの方の高い山にあります。爰でちよつと面白いと思ひますのは、ボルネオで一つでも蘭の輸出税金を取ります。どんなつまらない物でも持つて出れば百五十弗出さなければなりません。それから船で世界一の稱あるサラワツクのバイナツブルを食べましたが、非常に大きく味の美しいものでございます。

新嘉坡に着きましたのは四月の十五日でございまして、此邊は蘭は一體に少なく。ポダニカルガーデンの蘭とサヒブといふ男が商賣をして居ります蘭を見ました。又三井の蘭と支那人の蘭を見ました。併し是等は種類と致しては殆ど見るべ

きものは少ない。以前から私等も知つて居りますペレラーといふ商賣人が居りましたが、それは何か外の商賣で失敗をして分りませぬでした。餘り新嘉坡では蘭は研究する價值もございませず、又購入致すものもなかつたのでございます。

新嘉坡は二日程で又船に乗りましてペナンに寄りましてランゲンに参りました。ランゲンに着きましたのが四月の二十三日で、三井の紹介で福島君と云ふ方に御目に掛りました。福島君は以前に亞米利加に澤山の蘭を輸出したこともあり、多少蘭を集めたこともあるといふ話で、色々事情を聞きたいと思つて参りました。私は先づ緬甸では是非ムルメンに行つて見たいと思つて居つたのであります。それは英吉利で發行致しました書物には、蘭の産地は皆ムルメンと書いてあります故、其ムルメンといふ所はどういふ所か行つて見たいと思ひました。所が向ふに行つて見ますと、意外なのに驚きました。殆どムルメンには本に書いてある植物は一つもない。二三種類しか綺麗なものはない。どういふ譯かと聞いて見ますと

素と緬甸で蘭を集めて居つた者がムルメンに居たさうです。其人が英吉利にムルメンから送つたものですから、皆産地をムルメンと書いて居るのであります。

### 野象を見る

ムンメンでは色々採收など致しまして、タトンに寄り、矢張り山を見まして、ラングンに又戻りました。一日休みまして内部の方を見たいと存じまして、ラングンを四月の三十一日に立まして、汽車でマンガレーを通りまして、メシオに参つて山を見ました。又少し先のゴテイツクといふ所に参りまして、爰でも採收を致しました。それから又メシオに戻りまして自動車でマンガレーに下りまして、河船でタベチンといふ所に参り、又自動車でモーゴクといふ所に参りました。モーゴクは六十尺以上ございますから、緬甸でも高い所でございます。

話が又前後致しましたが、比律賓と同じやうな平原と中位な山と高山とを見たいと思つて、モコクを選んで参つたが、爰は時日がないので、山に充分這入るこ

とは出来まぬでしたが、三四千尺の所に澤山の蘭がございまして、其邊で寫真を取つたり採收をしたりしました。それから船でバアモ迄参りました。バアモでは日本に蘭を送つて居る者があります。此邊はどういふ状態か見たいと思つて参りましたが、平原で殆ど蘭はありません。皆雲南の國境の方の川から持つて來たものを其處で集めて賣つて送り出して居るのであります。爰では面白いものはいまありませんが、野象が捕れて居ると云ふ事を聞きました故之れを見に参りました。二十六頭捕つて其時十六頭生きて居るのを見ました。

それからバアモを立ちまして、又船でカターといふ所に参りました。それから汽車でマンガレーに來まして、マンガレーからダシーといふ所で汽車を乗換へまして、カロといふ所に参りました。此所は四五千尺のテーブルランドになつて居ます。氣候は非常に良い所でございます。カロから又自動車で参りますと湖水がございします。インゼレークと申します之れよりハイオンに参りました。其邊

の森林は皆割合に深くございませぬ。常緑樹もございませぬし、落葉樹もあり、低い所に蘭が澤山着いて居ります。色々種類は各地に散つて居りますから、我々が参りまして一度に種々なものを集めることは出来ませぬ。或特殊のもの丈け見まして、それからラングンに歸つたのでございませぬ。

### ビルマの蘭

大體に於て緬甸ではどういふ風に蘭が分布されて居るかと申しますと、平原よりも高い山に多いのでございませぬ。高い山の極く空氣の良い、温度が餘り高くなく、さう低くもなく、日光が良く當つて、濕氣の比較的多い、人が居りましても氣持の良い所に蘭は生へて居つて、平原の熱い所には少ないのであります。最も多いのはシャンステートで、次はアラカンが多く、チンヒルは未だ人跡稀れであります。又スライバゴタといふ所がテナツセリウム州にございませぬが、此邊も六千尺位の所にございませぬ。チンヒルよりアツサムの方に掛つてあります。此シヤ

ンステート、アラカン、アツサム近くのチンピルの三地方が殆ど緬甸の産地と云つて宜い位であります。此間には色々なものがございませぬして、實に緬甸は、種類も多うございませぬが、量の多いのに驚いたのでございませぬ。到る處に土人が皆村の木に澤山着けて居ります。それかも氣候は高い所と低い所では大變違ひませぬ。高い所は冬は温度がかなり下るのでございませぬ。四十七八度から四十度位になる所があるやうに思はれませぬ。私が参りましたモーコックなどは一番緬甸の熱い時で、夜分は六十度位になりました。さういふ所は冬になると可なり寒いだらうと思ひませぬ。又雨量はムルメン、ラングンの邊が多うございませぬ。シャンステートの邊は其割合に多くないやうでございませぬ。又マンタン邊りでは少いやうでございませぬ。蘭といふものは雨量が非常に多くてもいけず、中位の百インチ位の程度の所が一番多いやうでございませぬ。

### 蘭は印度に少し

森林の状態を申し上げますと、比律賓は常緑樹が多くて、葛か桂かございませが、緬甸はそれに反しまして、落葉樹が非常に多い。乾燥期は皆葉が落ちて日光直射のもとに蘭の花が咲いて居りましたのが澤山ありました。私の参りましたのは全く乾燥期でございませから、山に這入りましても殆ど下に青いものなどはございませず、自由に中に這入れます。上を見ますと殆ど葉のものは少いから能く蘭を見る事が出来ます。比律賓などとは大分状態が違ひます。又種類は山斛の類が一番多く。次ぎはベンダといふ種類、それから敦盛草類のシヘリジンユームと云ふた様な類が一番多いのでありまして數量も多くございませ。此の外のものも申上ぐる迄もなく非常に澤山ございませして、植物學的のものなどは實に多いのでありませ。

採收はどういふ風にして居るかと申しますと、矢張り何か商賣を持つて居る者が片手間に土人に採收さして、それを買集めて居ります。シスンステートンとア

ツサム地方並びにアラカンと各地で採收さして、それを集めて方々に輸出して居ります。輸出の主な所は英國と米國、ベンダセルヤソンと云ふ一種類のみでも殆ど何萬といふものを一年に出して居ります。

それから今度ラングンを立ちまして印度に参りました。印度は一體蘭は餘り多くないのでございませけれども、ヒマラヤの近邊に色々なものがございませ。それを見たいと存じまして、カルカッタには少し居りまして、直ちにダージリンに参りました。ダージリンは御承知の通り六千八百尺から七千尺位の所にダージリンの町がございませして、植物園もございませし、ホテルの設備もなか／＼能く居いて居ります。其處に参ります途中の三四千尺位の所に色々な蘭の種類が見られます。登山鐵道で廻つて行きますと能く其状態が見られます。ズット上に参りますと石南花帯シヤンナになつて居りますから、氣候も非常に涼しく、其處に矢張り蘭が二三種類ございませました。一日植物園に参りまして色々尋ねますとダージリン近邊は

餘りないが、シツキムに行くところといふことを植物園の園長が申して居りました。シツキムの内部に行つて見たいと思ひましたが、餘日もございませぬから山を下りまして、ランギット河の所まで参りましたが、此邊にしては見るべきものはございませぬでした。カルカッタに歸りまして、實は印度の内部を觀光の意味で廻りたいと思つたのでありますが、内部は非常に氣候が悪くて、到底行つても見ることも何にも出来ないから、もう少し雨が来るのを待つたら宜からうといふことを言はれたものですから、それを待つ間、一週間程何處かに行つて見たいと存じましたが、別に考も付きませぬ中に、三井の方が猛獸狩に行くといふことを聞いて、それなら私も是非連れて行つて戴たいといふて終に参りました。私は鐵砲の經驗が餘りないのでございませぬから、殆ど人の後に隠れて見に行つたのでございませぬ。

#### バイテンソルフの二日

印度の氣候は御承知のやうに、餘りに大陸的でございまして、非常に暑く、乾燥期になりますと全く乾燥して、平素には餘りない。さうして前に申上げましたボンベイ、サイド、セーロン及ヒマラヤ、サイドにある丈けでございませぬ。印度は猛獸狩に行つたり何かして、雨を待つて内部に行く積りでございませぬが、少し家の方に用が出来まして、急に引返さなければならぬやうになつたものでございませぬから、直ちに船を求めまして、爪哇を廻つて日本に歸ることにしました。六月の二十四日に船に乗つて、新嘉坡に急行致し、七月八日の船で爪哇に渡りました。

爪哇は御承知のやうに熱帯農業が開けて居りまして、我々の山廻りには不適當でございませぬ。種類は割合に多くございませぬが、矢張り植物學的に面白いのでございませぬ。翫賞用としては二三種類に過ぎないのでございませぬ。私はパタピヤを始めと致しまして、バイテンソルフに二日程居りまして、直ちにシンダンラヤ、

パードン、カルカールを経てチカジャンの方に参りまして、ババンダヤンといふ山の中腹の佐藤氏の農園に参つて泊りまして、其近邊を見ました。それからジョクジャに寄りまして、スラバヤに出で、急行致してパタビヤに参りました。爪哇で山を見たのはチカジャンばかりでございます。

チカジャンの邊の森林は、大きな木もございすし、又色々蘭があるのでございますが、綺麗なものも殆どなく爪哇の特産のバンダートリカラと申しますのを採集致しました。之れは三つの色がある、白地に黄色の點々がございまして紫紅色の唇瓣の花であります爲めトリカラと名が附いて居ります。其産地は前申上げたチカジャン近邊其他諸地にございす。此所で驚きましたのは意外に開けて居り、さうして深い森林には返つてなく村近くの椰子の樹などに自然に着いて居ります。又トーサリ又は矢張四千尺近邊に同様なものを色々見ましたが、是は山に這入りませぬでしたから採收も出来ませぬでした。大體に於て爪哇は綺麗なもの

も少いし、又時日もございませぬで爪哇の方は能く見ず、唯観光といふ意味で廻つた丈けでございます。

### 蘭米と蘭花

今回は他の蘭の産地のセレベス、サラワフク、サイアムの邊に参る豫定でございましたが、行くことが出来なかつたのは残念に思つて居ります。

今回旅行致しまして、自然の状態を見まして、培養上に非常に参考となることがありました。其一例を申し上げますと、熱帯に産して居る蘭でございすから非常に熱い所にあるだらうといふことを想像して居りますと、意外に蘭の在る所は非常に涼しいのでございます。それで之を培養致します上に今迄と餘程變つた。

さうして又温度なども高めずに經濟的に培養が出来るといふこと、感じました。其他色々な點がございすますが省きまして、蘭一般のことを少し補足致し度いと思ひます。蘭の趣味といふものは殆ど今は世界的になつて居るのでございす。



唯好きなき者が之を愛翫して培養すると云ふばかりでなく、前に申上げたやうに實用方面にも可なり用ひられて居ります。それは室内裝飾とか、又食卓の盛花とか或は花環に用ひられて居るのでございます。どうして蘭を用ふるかと申しますと、蘭の花は外の草花に比べまして高尚で美しくあるのみならず、開花期が長いのでございまして又良く長く持つのであります。中には取除けもございしますが、大體に於て蘭の花は切つてから二週間位は裕に持つのでございます。それでございませうから之を食卓に使ひまして、尙ほ又あとを取去つて、花丈けにして眺めることも出来ませうし、鉢の儘に置きますと、二週間花を變へずに眺めることが出来ませう。英米の雜誌で見ますと、なか／＼盛のやうでございませう。一つの雜誌に出て居るのを見ますと、加奈陀で南米にある大きな花の咲く香ひの良い種類を何萬と一度に作りまして、それに花を咲かせまして、箱詰にしてニウヨーク迄出して居るさうでございませう。東洋の物では比律賓の桃色の胡蝶蘭などは、多い時は何千とか

何萬とかいふものを亞米利加に送りまして、鉢に植えずに列べて花を咲かせ、それを直ぐ切つて市場に出すと非常に金になるさうでございませう。緬甸のバンダーセルヤと申します蘭は、蘭には割合に少いブリューの色がございませう。是が矢張り何萬と英米に参りまして、鉢に植えずに花を咲かせて、直ぐ切花として出して居るさうであります。それだけ營業にして居る者が可なりある様でございませう。さういふ澤山の蘭をどうして送るかと申しますと大變に都合の好いことには、蘭は或程度迄乾燥に堪ふるものであります。乃ち乾燥時期には殆ど三月の間雨が降らずに生きて居ります。其習性を應用しまして、蘭を取つて参りまして、一旦すつかり乾燥させて箱に鉢屑の極く小さいのを敷きまして、其上に蘭を一通り列べて、其上に又鉢屑を入れて、順に箱詰にして送れば三十日か四十日は決して枯れません。到着してから水をやると、乾燥季から雨季が來たやうに一週に直つて仕舞ひませう。之を能く御土産の爲めなどに途中で苦心をされて、水をやつて御持ち

歸りになる方がありますが、水をやると却て腐る虞があります。箱などに入れてある物に水をやると皆腐つて仕舞ひます。此事に付て比律賓で聞いて御氣の毒に感じたのは、それを御存じない爲めに、バンダーイレンサンデリアナといふ綺麗な花を買つて、途中で水を絶えずにやつて來られて、馬尼刺の商賣人の所に持つて行つて之を買つて呉れないかと云つた所が、商賣人は到底今は青々して居つても水をやつてあるから駄目だ、是は必ず枯れて仕舞ふ買ふことを出來ないと申したさうであります。それでは價格はどの位のものかといふと、籠が七八つ位あるから、生きて居つても五百圓位だらうといふ話をした。イヤ私は千圓出して買つて來たから、どうしても二三千圓には賣らなければならぬといふと、それなら隣に比律賓の商賣人が居るから、持つて行つたら宜いでせうといふので、比律賓人の所に持つて行くと、十五ペソといふ値を付けられたので、非常に怒つて持つて歸つて、預つて呉れぬかといふので、責任を持たずになら預かりましょうと云ふこ

とになりましたが、終に殆ど枯れて仕舞つたといふことでございませう。蘭の性質を良く知つて居れば實に簡單なものであります。

### 蘭の價格

それから價格と致しましては、昔は蘭と云ふものは高價なもので英吉利などは昔の雑誌を見ますと、一つの物に何千圓とか何萬圓と云ふ金を拂はなければ能いものは手に入りませんでした。日本では私の聞きましたのでは、二十五六年前に大隈さんが英吉利から一株五十圓も出して買はれたと云ふことを聞いて居りました。蘭が現在では二三圓のものであります。さういふやうに下つて參りましたのは人工で良い物と良い物とを掛け合すと色々なものが出來ます爲めで今の種類としては、人工の方が多いのでございませうから、段々値段は下つて參りました。一つ面白い話があります。アッサムに始めて發見された蘭を英吉利に持つて來ると一萬圓に賣れたといふので、翌年さういふものはないか、五つ六つあつても大金

になると云ふので探した所が、一度に何千株といふものを発見致した爲めそこで一萬圓もして居つたものが一度に澤山見付かつた爲め、殆ど十圓の價值もなくなつて、只今では二三圓で求められます。さういふ風に極く珍しい中は高價であります。近來は段々發達して、本當に資格のある容易に得られないものでないと、さういふ高い價格はなく大體に於て安價で手に入ります。比律賓邊りの胡桃蘭は昔二三十錢で求められたものですが、それが近來は甚だ少なくなつた爲め、容易に得られないものですから、大概二圓から五圓位の價をして居ります様の次第でございます。澤山出る産地は別と致しまして、私が今回参りました所で、驚きましたのはミンダナオのザンボアンか、新嘉坡、爪哇でございます。それは殆ど二十年前の價格であります。只蘭は非常に高價なものと云ふ事を考へて居りますが、英吉利から取寄せると、その何十分の一で求めらるゝものがあります。そんな風に蘭の値段といふものは英國の市場が元になつて居る様であります。近來は世

界的になりまして漸次全體に及んで居ります。

蘭の趣味は現在非常な勢ひで世界各国に及んで居ります。將來も尙ほ此趣味は益々廣くなり、さうして又實用方面に普通の花のやうに使はれるだらうと思ひます。私は今度旅行致しまして色々温度の點などを知りまして、火を焚かずに綺麗なものも容易に作る事が出来はしないかといふことを感じました。是から大にさういふ方面を研究して誰でも簡単に美しい花を栽培することが出来るやうにしたいと云ふ希望を持ちました。

非常に長くつまらないことを申し上げまして、洵に申譯がございませぬでした。何卒御許しを願ひます。(完)

## 南洋協會の目的

- 一、南洋に於ける産業、制度、社會其他各般の事情を調査すること
- 二、南洋の事情を本邦に紹介し、本邦の事情を南洋に紹介すること
- 三、南洋事業に必要な人物の養成をなし、本邦の技藝其他學術の普及を計ること
- 四、雜誌其他出版物を發刊し、時々講演會を開くこと
- 五、南洋博物館及圖書館を設くること
- 六、其他必要な事項

### 南洋協會役員

會頭	男爵	田健治郎
副會頭		内田嘉吉
同		和田豐治
相談役		小川平吉
會計監督		江口定條
専務理事		井上雅二
(イロハ順)		
理事	男爵	伊東米治郎
		東郷安太郎
		井上敬次郎
		山成喬六郎
		藤瀬政次郎
		江口定修
主事		飯泉良三
		三徳五郎
新嘉坡商品陳列館長兼新嘉坡支部長		賀來佐賀六郎
臺灣支部長		賀來佐賀六郎
爪哇支部長		松本幹之助

大正十二年四月七日印刷  
大正十二年四月十日發行

不許  
複製

發行所  
發賣所

南洋協會續講演集  
定價金二圓五十錢

編輯者 南洋協會

右代表者 東京市麴町區八重洲町一丁目一番地 小原敏丸

印刷者 東京市芝區櫻田太左衛門町八番地 徳山爲夫

印刷所 東京市芝區櫻田太左衛門町八番地 福山堂印刷所

東京市麴町區八重洲町一丁目一番地

南洋協會

東京堂・東海堂・北隆館・至誠堂

佐藤 璋 君 著

南洋研究叢書 第一篇

# ロブスタ珈琲

四六版約三百頁  
寫真入頗美本  
定價金 貳圓  
郵稅拾 貳錢

珈琲は、熱帯最古の歴史ある産業にして然かも永遠の將來を有する産業也、従つて其研究の餘地多々あるは論を俟たず、由來、南洋は土地廣濶、地味肥沃、護謨に、砂糖に、其他生産の數ふ可きもの多りも、此の歴史的背景と科學的將來を有する點に於て、珈琲栽培は、蓋し南洋屈指の好産業たらずんばあらず、これ本協會が南洋研究叢書第一篇として本書を發行する所以なりとす、著者は夙に農業大學にありて熱帯農業を研鑽する事三年、更らに爪哇に渡りて、彼地、外人珈琲園に入り従業研究する事更らに數年、學理と實際とより歸納して茲に本書成る、敢て江湖に一讀を薦む。

前貴族院書記官長  
南洋協會調査囑託 江柳 川國 俊男 君 著 序

南洋研究叢書 第三篇

# ハルマヘイラ島生活

四六版二五〇頁  
地圖寫真版入美本  
定價金 二圓  
郵稅拾 貳錢

南洋セレベスの東に寶島あり。ハルマヘイラ島と云ふ。地熱帯圈内にありて瘴熱甚しからず、島小なるに非らざるも猛獸毒蛇の棲むなく、人文未だ開發せざるも島民に蠻習の怖るべき無し。加ふるに島内未發の富源人の來て發くに任す。唯憾むらくは地少しく僻遠にありて人の知るなきのみ。著者この僻遠の寶島に來往する事兩回、遂にこれを墳墓の地と呼ぶに至る。今先づ其真相を記して之れを江湖に紹介す。圖南の志を有する者、この新ロビンソン、クルーソーの手記を讀め、讀んで而してこの寶島の真相を知れ。

南洋研究叢書  
第四篇

# 領内南洋誌

前南洋防備隊司令官 東郷吉太郎君題辭  
前南洋防備隊中將 手塚 敏郎君序  
南洋協會事務理事 井上雅二君序  
前南洋防備隊島海軍省 臨時防備隊民政部長 島田昌三君編  
前南洋防備隊 民政附通譯官

四六版二五〇頁  
地圖寫真版入  
函入頗美本  
定價金貳圓五拾錢  
郵稅拾貳錢

筆を領内南洋——舊獨領南洋——の沿革に起し、其位置、面積、氣候、地質、風俗、人情、産業、交通の諸項に就き、細大洩す所なくこれを詳述せり。著者曩に南洋防備隊通譯官として彼地に赴任親しく實地の踏査研究を積み、歸來拮据二年有半起稿改訂數次、斯くて本書漸く成る。類書中の白眉たると同時に、一般渡航者並に地理學教室に必要不可欠の好著なり。特にヤップ島間題の喧傳せらるゝ今日、敢て一本を一般國民に薦む。

南洋研究叢書  
第五篇

# 南洋の回教

瀬川 龜君 著

四六版二五〇頁  
寫真版入美本  
定價金貳圓  
郵稅拾貳錢

南洋の富源を究めんと欲する者は、南洋を知らざるべからず、南洋を知らんと欲する者は、南洋土民の人情風俗を知らざるべからず、南洋土民の人情風俗を知らんと欲する者は、先づ其根原たる土民の信仰を極めざるべからず、これ本會が特に回教に關する、本邦の最高權威者、瀬川氏に囑して本書を上梓する所以なり。本書を繙く者にして初めて、眞に南洋を知るを得べしとす入し。

農學士 石橋三郎治君譯

南洋研究叢書 第六篇

# 蘭領印度商法

四六版二〇〇頁  
定價金貳圓  
郵稅拾貳錢

本書は曩に出版せる、蘭領印度土地法の姉妹編にして、同じく蘭譯法文を英譯に附し、更に之れを邦譯に附せるものなり。嘗に彼地企業家の好參考書たるに止らず、南洋研究者にとりて、必要不可缺の好著たるは嗚々を要せざる所なり。

南洋協會編纂

南洋研究叢書 第七篇

# 南洋協會講演集

四六版三五〇頁  
新形頗美本  
定價金貳圓半  
郵稅金拾貳錢

本會發始以來講演會を開催する事實に六十有餘回、講演名士の數無慮一百を越ふ、速記に附せし卓論高説約一萬頁を算す。今中に就き、粹を抽き精を擇び茲に本書を編む。據つて南洋諸般の事情を闡明し得るに止らず、他面以て講演諸名家の雄辯宏辭に接し得べきか。

商學士 舟木茂氏編

# 蘭領東印度史

南洋研究叢書 第八編

四六版五五一頁  
天金函入美本  
定價三圓半  
郵稅十二錢

日本及本日人日

南洋協會が南洋研究に關する書籍を刊行して吾國民圖南の志に資する所あるは多とする所なり。本書は其南洋叢書第八、第九編として公にせらる。東印度古代より、東印度會社の初期時代に筆を起し、東印度會社全盛時代、同會社解散時代に及び、更に現在の政治、經濟、風俗、衛生事情に至る迄、詳細調査記述せられたり、南洋に志あるものは勿論一般學徒も一讀の價あり。

(定價三圓五十錢發行所東京市麴町區八重洲町一ノ一南洋協會)

ウイルフレッド・ビーヴァ原著  
神村 興 三譯

# 黑暗ニユーギニヤの真相

南洋研究叢書 第十篇

四六版 二八〇頁  
定價 二圓半  
郵稅 十二錢

中央新聞日

南洋研究叢書の第十編である、濠洲人にして豫ねて、ニユーギニヤ政廳の官吏であつた、ウイルフレッド、ビーヴァ氏の著作を論譯し、少くとも此の方面に關する知識を得るに於て簡單明快なる案内書の一である、邦人に取つて、ニユーギニヤは恐らく風馬牛ノ土地ではない、而も同地を知るべく殆ど參考書類を缺く事情に顧み、本書の如きは實實なる好著作たるを失はぬであらう。



蘭領東印度政廳  
日本事務局長

フアン、デ、スタット氏著

# 實用蘭和辭典

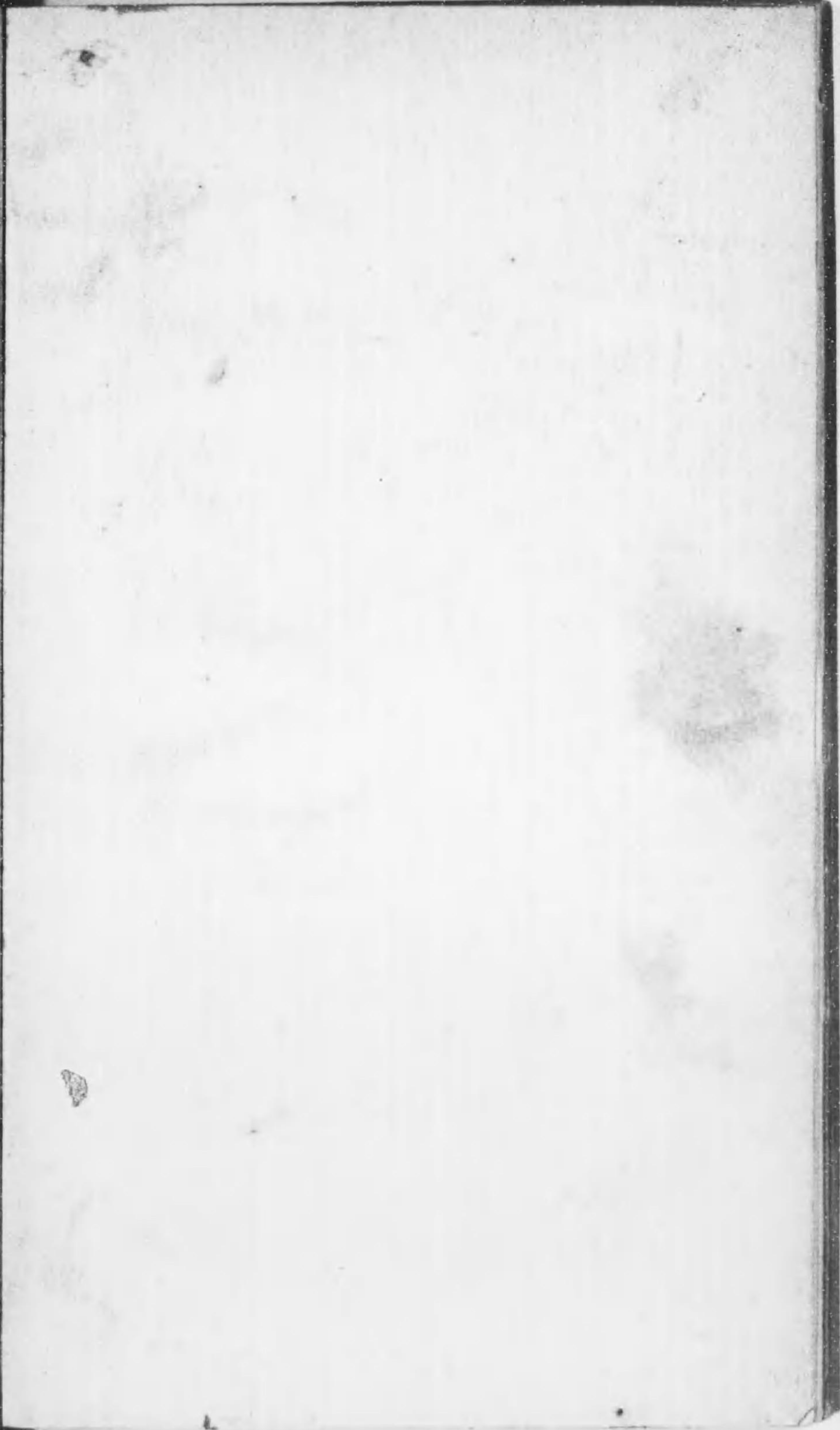
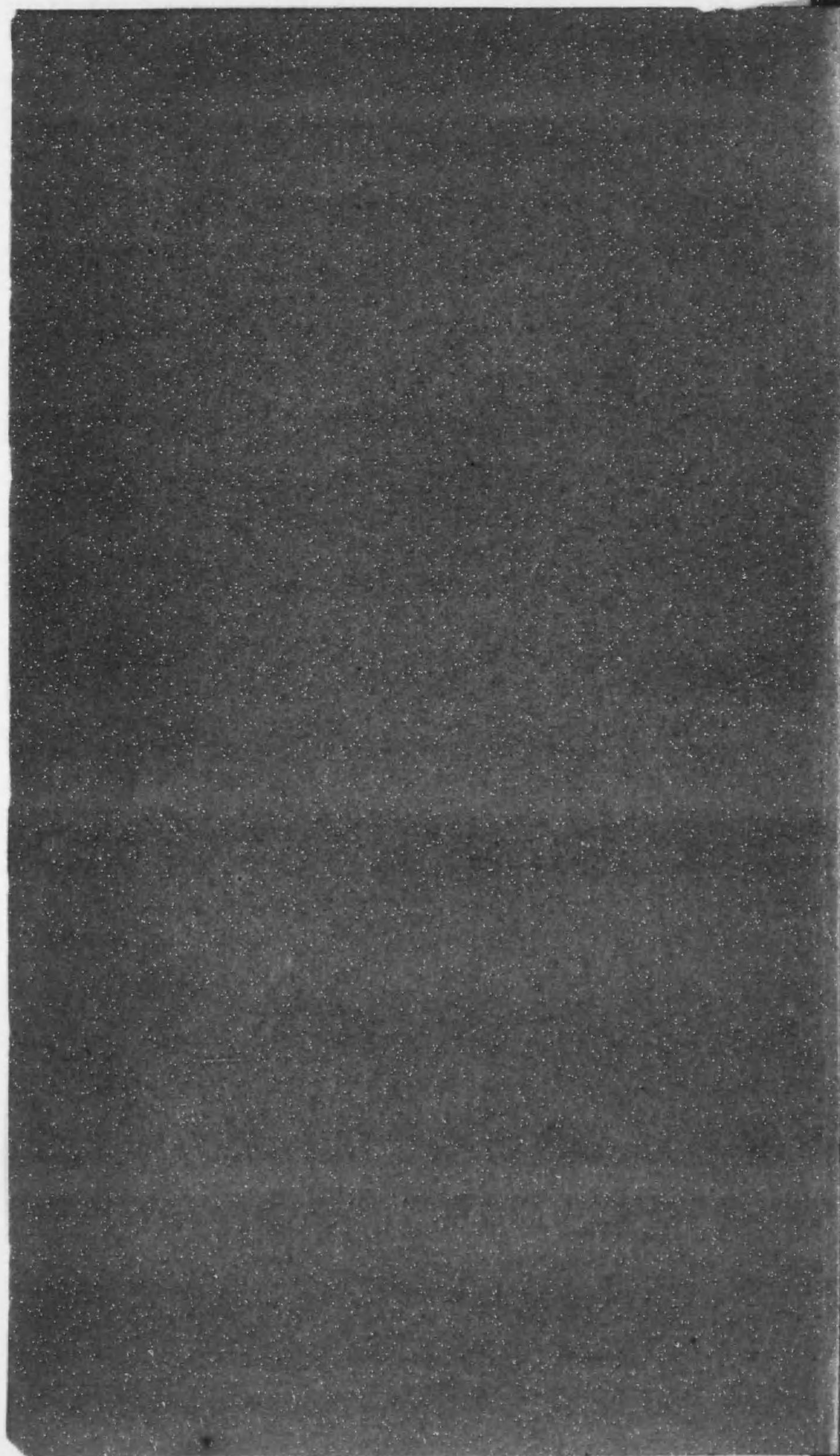
袖珍版六〇五頁  
定價金四圓  
郵稅拾貳錢

蘭人にして邦語を練る者少からず、而も我フアン、デ、スタット氏の如く巧みなるは少し、蘭人にして邦文を善くする者はあり、然も本書編者の如く善くするは稀なり、實用蘭和辭典はこの邦語を練ること巧妙に、邦文を草する堪能に、且つ日本を識るに於て、蘭人中稀に視るスタット氏が拮据三年苦心の結果編纂せるもの、蘭語修得者の座右不可缺の好著なり。

發行所

東京丸ノ内仲通十四號  
振替口座東京三二〇四八番

南洋協會



500
3

終